

最初に教わるものほどむずかしい

今まで代名詞の話を中心にしてきたが、これから数回にわたって冠詞の問題を取り上げたい。私のフランス語学の師匠であった故大橋保夫先生は、「文法教科書の最初に出て来る項目ほどほんとうは難しい」と常々話しておられた。若い頃には先生のお言葉の意味がもうひとつよくわからなかったが、この歳になって確かにそうだと痛感する今日このごろである。文法教科書はたいてい名詞の説明から始まり、名詞には男性・女性の性の区別と、単数・複数の数の区別があると解説されている。次に、名詞は性と数に応じてちがう形の冠詞がつくと続き、冠詞の解説があるのが定番となっている。

「名詞には性と数の区別がある」と説明されることが多いが、性と数はお神酒徳利のように、同列に並べてよいのだろうか。そうではないと思う。性は名詞の「内在的文法範疇」だが、数は「外在的文法範疇」だからである。おととつと、つい言語学者の呪文を使ってしまった。平たく言うと、性は名詞ごとに決まっています変えようがないが、数はそうではなく、単数にするか複数にするかは話し手が決められるという意味である。その証拠に、名詞の性の区別は、単語ごとに辞書に書いてある。「この名詞はほんとは男性なんだけど、ちょっと女性として使ってみようかな」というわけにはいかないのである。だから性は名詞に内在しているという。中に含まれているので変えられないわけですね。一方、数はそうではない。数えられる名詞の場合、私が「一冊の本」と言いたければ un livre と単数に、「何冊かの本」と言いたければ des livres と複数にするのだから、話し手の意図に応じて変えることができる。だから数は話し手が「外から」名詞に与える区別である。ただし、des funérailles 「葬式」、des entrailles 「内臓」、des fiançailles 「婚約」などの一部の単語は、複数形でしか使えないので例外である。ごく一部のこのような例外を除けば、名詞に付随する性と数という二大特徴は、神社の前の二頭の狛犬のように同列に扱ってよいものではなく、別々のレベルで名詞に働いていると考えなくてはいけない。

さて、みなさんご存じのように、フランス語の不定冠詞は、名詞の性と数と、それに加えて可算（数えられる）非可算（数えられない）という区別で形が変わる。男性・単数・可算だと un livre で、女性・単数・非可算だと de la viande である。こまではいいですね。

それではここでひとつ問題を出そう。先ほど、性は名詞の「内在的文法範疇」だが、数は「外在的文法範疇」だと述べた。では可算・非可算の区別は、内在か外在かどちらの文法範疇だろうか。

性のような内在的文法範疇は、辞書に単語ごとに書いてある。数のような外在的文法範疇は、辞書には書いていない。では可算・非可算の区別はどうか。英語の学習辞書には  $\square$   $\square$  という記号で書いてあるのがふつうである。しかしフランス語の辞書には可算・非可算の区別が書かれていないではないか。『プチ・ロワイヤル仏和辞典』（旺文社）第2版は、仏和学習辞典ではただひとつ可算・非可算の区別を載せていたが、2003年の第3版で削除されたので、今では書いてある辞書はひとつもない。これはいったいどういうことなのだろうか。

この問題については、もう少し後で謎解きする予定なので、それまでみなさんご

自分の頭で考えてみていただきたい。

冠詞はほんとうに必要なか

今回は冠詞の第1回目なので、初心に立ち帰って基本的問題から考えてみることにしよう。「冠詞はほんとうに必要なか」という問題である。たぶん大部分の読者はそんなこと考えてみたこともないだろう。フランス語を学ぶときは、「不定冠詞はこうこう、定冠詞はこうこう、では覚えてくださいね」と言われて、いきなり練習問題なんぞをやらされてオタオタするのである。

「冠詞はほんとうに必要なか」という疑問は、「冠詞は何の役に立っているのか」という疑問とほとんど同じである。何の役にも立っていないのなら、必要ではないはずだからだ。日本語のように冠詞がない言語でも、十分に相手に意味を伝えることができているのだから、ほんとうに冠詞など必要なのだろうかという疑問はもっともなのである。

『フランス語手紙の書き方』（大学書林）という本を見ると、「電報」という項目がある。試しにいくつか例文を見てみよう。訳文にも時代を感じる。

- (1) Lettre reçue enverrai argent 「フミミタ カネオクル」
- (2) Heureuse nouvelle nous apporte grande joie 「オオイニヨロコバシ」

電報では一人称の *je* や冠詞は省略する。前置詞もできるだけ書かない。(1) は *J'ai reçu votre lettre. Je vous enverrai de l'argent.*、(2) は *L'heureuse nouvelle nous apporte une grande joie.* だから、部分冠詞 *de l'*、定冠詞 *la*、不定冠詞 *une* は省かれている。だが意味はなんとかわかるのである。ならばますます冠詞はほんとうに必要なのかと思えてくるのも無理はない。

しかし、ここには落とし穴があることにも注意しよう。(1)(2)のような電報文を読む人は、無意識のうちに欠けている単語を頭のなかで補って理解している。だから、電報文の意味がわかるからといって、ただちに冠詞は必要なしという結論にはならないのである。

- (3) 私は犬が好きだ。 "J'aime les chiens."
- (4) 私は犬を飼っている。 "J'ai un chien. / J'ai des chiens."

冠詞のない日本語でも、(3)の「犬」は犬一般をさし、(4)の「犬」はある特定の一頭（または数頭）の犬だということは誰にでもわかる。それは「好きだ」という時間・空間に関係なく成り立つ述語と、「飼っている」という「～テイル」形で終り、時間・空間に支配されている述語の意味のちがいが、「犬」という名詞の意味の差を推測する十分な手掛かりになっているためである。だからフランス語で冠詞が果たしている役目を、日本語では他の手掛かりによって推し量っているということになる。

冠詞はすべて復元できるか

フランス語における冠詞の働きを、さらに別の角度から考えてみよう。何でもいいからフランス語の文章に出てくる冠詞を全部隠してしまい、フランス人に隠した冠詞を復元してくれと頼んだとする。次のようにするのである。

(5) En rentrant des champs ( a ) soir ( b ) parents voient ( c ) chat sur ( d ) margelle du puits qui passait sa patte 50 fois derrière ses oreilles en faisant sa toilette. Il va encore pleuvoir demain, se disent ( e ) parents. Et effectivement ( f ) lendemain matin, il plut. Il plut tellement fort que ( g ) parents ne purent pas aller aux champs.

「夕方になって畑から戻って来たとき、両親は井戸の縁石の上で猫が身繕いをしながら前足を50回も耳の後ろにやるのを見ました。きっと明日は雨だよ、と両親は言いました。確かに翌朝は雨で、ひどく降ったために両親は畑に行くことができませんでした。」 [ 原文では (a) le (b) les (c) le (d) la (e) les (f) le (g) les ]

ここで考えてみたいのは、「フランス人は隠した冠詞をすべて復元できるか」という問題である。フランス人にとってフランス語は母語なのだから、冠詞に苦労するわれわれとちがって、苦もなく復元できるだろうと考える人もいるだろう。私は教室で学生にたずねることにしているが、「できる」と答える学生が実際に何人かはいる。しかし、それはおかしい。正解は「できない」である。なぜなら、もし隠した冠詞を完全に復元できるとしたら、冠詞は何の機能も果たしていないことになるからである。

例えばフランス語の綴り字の q は、cinq のような単語の終わりを除いて、必ず次に u の文字が来る。quai 「棧橋」、question 「質問」、qui 「誰」のような例を見ればわかるだろう。さて、ここで q の次にある u を全部消してみたとしてしよう。消した u は完全に復元できる。だから u は何の役目も果たしていない。明日から綴り字を変えて、上の単語を qai, qestion, qi と書くことにしても、何の不都合もない。だから、消した冠詞をすべて元通り復元することができるとしたら、それは冠詞には機能がないということになるのである。

これには証拠がある。ある言語学者が(5)で始まるお話を子供に聞かせて、その後でたった今聞いたばかりの話を子供に再現させるという実験をしたことがある。子供の再現の一例をあげる。記憶ちがいもあるので完全な再現にはなっていない。

(6) Ça commence puis un jour il y avait un chat. Il écoutait toujours avec une oreille comme ça. Et puis toujours quand il se mettait comme ça tous les jours il pleuvait...

おもしろいのは原文で *le chat* と定冠詞である所が、子供の再現では *un chat* と不定冠詞に変っている点である。実際、(5)のテストをやってもらったら、不定冠詞を選ぶフランス人が多いだろう。

これは何を意味するか。隠した冠詞を元通りに復元できないということは、話し手(書き手)には不定冠詞を使うか定冠詞を使うかという「選択の自由」があるということである。コトバの働きの一般的原則として、「機能」は「選択の自由」を前提とする。「選択の自由」のないところに「機能」はない。上で見たように、冠詞には選択の自由がある。だから冠詞には機能があるのである。ふだんフランス語を学ぶときには、「次のカッコに適切な冠詞を入れなさい」などという練習問題をやらされるせいか、「冠詞は常にひとつに決まる」と思いこんでいる人がいるとしたら、それは教え方が生み出してしまった残念な誤解である。それでは冠詞の機能とは何か。という所で紙幅が尽きてしまったので、次回に続くのである。

(とうごう・ゆうじ)